

自分を信じ、自分にしか歩めない人生で、社会に貢献を！

福田 妙美 (38回生)

みなさん、臨床検査技師をご存じですか？
私は、臨床検査技師として20年間、大学病院で働いてきました。病院で検査結果をドキドキしながら待つ患者さん。そのドキドキの間、私たちが患者検体を迅速、正確に分析し、検査結

果を報告します。臨床検査技師になると決めたのも、人生を乗り越える力を付けたのも新宿高校時代でした。

入学式で覚えていることは「この高校には、校則はありません！ 自主自立。自分で考え、行

動したことは、自分で責任を取る。以上！」との先生の言葉が、この高校を象徴するものでありました。自由の旗を掲げた新宿高校の3年間は、人生を生き抜くための強靱な土台構築の期間となりました。

伝統行事の遠泳は、陸上部の私にとって難行苦行です。遠泳中止を願ってやまない私も、多くの先輩、同級生に支えられ挑戦し抜いた経験が、社会の大波を乗り越える土台となっていました。本当に苦手なこと、嫌なことも、逃げずに挑戦すれば、下手から格上げで上手になり、気付けば人生の大きな財産となるのです。

小学生までは、当時の女の子が憧れるキャビンアテンダントが夢でした。しかし、中学生になると化学の実験が楽しく理系へと転身。高校では、物理にも興味を持ち理工学部も視野に入れた進路を検討していました。

高校3年のある日、図書館で勉強をしていると、友人が進路の本を持ってきて「面白い分野があるよ。これって、妙美に向いていると思う！」と教えてくれたのが、後の私の職業となる臨床検査技師でした。

物理と化学が好きな私にとって、検査機器を扱いながら臨床化学の検査を行える職種は魅力的。社会の変化があっても、国家資格を取得すれば好きな分野の仕事を長く続けられるとも思いました。何よりも、中学3年の時に母の交通事故を目の当たりにした私にとって、医療分野に進むことは自然な選択だったのかもしれない。

実験とレポート提出に追われた大学生活でも、友人や先生から多くの触発を受けました。特に、新宿高校の先輩でもあった教授が「今あるものを疑うことから研究は始まる。新たな発見は、疑問から始まるのです」と、快活に語る表情と声は今でも鮮明に覚えています。

国家試験の合格と共に、正式に大学病院の勤務が決まりました。大学病院に入所し、配属になったのが中央検査部の生化学検査室です。患者の検体（血液、尿など）を迅速に処理、分析

し検査結果を報告していきます。仕事は、机上の学問の基礎があればこそですが、命を預かる現場では、教科書からはみ出す出来事の連続です。

毎日の検査結果の管理が命の管理。十分な条件の血液量が無い、保存状態が適切で無いなど多くの変化球も、しっかり受け止め、速攻で正しい検査結果である直球を返さなくてはなりません。一人の命を支えるため、多くの病院スタッフとの連携と団結が重要であることを感じました。臨床検査技師も医療チームの一員です。命を預かる責任感をベースに、観察力、分析力と絶えまない探求心が求められます。検査の組み合わせで、患者の病態をより正確に把握し、治療に繋げていく。時々、検査結果と容態が乖離することがありました。それは、検査結果に表れない本人の生命力でした。この生命力が、病氣治癒に大きな役割をもたらしていると感じます。

病院勤務で感じたことは、予防できる病氣は予防して欲しいと言うことでした。

生活習慣がもたらす病は、自分の生活習慣を少し見直すことで健康を維持することも可能です。今ある体の機能を大切にしたいです。健康を維持できる社会の仕組みが必要と感じ20年間働いた大学病院勤務に終止符を打ち、6年前、政界に飛び込みました。

校旗を振る手は小さくとも、止めなければ世に風を起こし、必ず人の役に立つと信じています。みなさんも、進路などで悩むことも多いと思います。悩んで当たり前です。

自分を信じ、自分にしか歩めない道をまっしぐらに歩み続けてください。失敗しても、そこから逃げず向き合えば、財産となり幅の広い人間に成長します。

新宿高校生らしく、自分らしく頑張れ！とエールを送ります。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。)